
魔王の世界の救い方

由杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の世界の救い方

【Nコード】

N1620T

【作者名】

由吉

【あらすじ】

私、不肖ながら主人公の建速ミコトは目を覚ましましたらファンタジーな世界に飛ばされておりました。

とある少女との出会いは衝撃的の一言で、一目惚れをされた私は手足を折られ魔王の城に連れ去られると愛の責めで心身共にボロボロに。

そして勇者軍団が攻めてくるハプニング。

魔王はニートで働く気はないそう。

お父様、お母様、私は必ず帰ります。そして親孝行したいと思いま

す。

異世界現代人召喚ファンタジーの幕開けでございます。

プロローグ

今日も良い天気だ。雲ひとつない快晴で清々しい、実に清々しい。爽やかな風が木々をすり抜け肌に当たるのが気持ちいい。

でも、今の気分的には雨が降ってほしい。この四日間満足に飲まず食わずのサバイバルでもう瀕死の状態。喉がカラカラで腹ペコぐぐだ。まあ、そこら辺の葉っぱを食べて生き延びているが21世紀で暮らしていたもやしっ子には限界です。

何もない森の中で大の字で仰向けに倒れている俺こと^{たてはや}建速ミコトは生まれて初めてのサバイバルに悪戦苦闘しています。

ああ、生きるってこんなにも大変なことなんだな。全て人任せに生活してきたゆとりっ子でもやしっ子な訳で強制サバイバルを生き残るのは不可能に近いことが身を持って知った訳ですよ。

そもそも、なんで俺がこんな森でサバイバル生活を行っているかと言うと、正直俺でも分からない。だって、いつの間にか森にいたのだから。

今はこんな冷静でいるがこの森に来た当初はパニックを起こして発狂していたけど、今じゃ身体を動かすのもおっくうになって頭も冷えた。ついでに身体全体が冷たくなってきそうな気分。

さて、そろそろ誰かがタイミングよく助けにきてくれるはずなんだが一向に来ない。漫画みたいにそう簡単にいかないものらしい。人生なかなか上手くいかないなあ。初日からこの台詞を呟いているのだけど、もう三日が過ぎた。

人間限界を超えると悟りを開くと言うが今まさに俺は悟りを開いていると自分で勝手に思った。あ、いや俺が言いたいのは人間限界

を超える」と精神がおかしくなるんだな、ってことだと訂正する。

自分で何言っているんだか分げわからない。とうとう俺もおかしくなってしまうたらしく悟りを完全に開眼した仏様になるまでのカウントダウンが始まったようだ。

眠い、眠いよ、パトラッシュ。天使が見えるよ、パトラッシュ。そんな犬はここにいないのだけど天使ははっきり見える。ほら、天使が俺に手を差し伸べてきたよ。ああ、天使を包む光がとても暖かいや、太陽の光のことだけど。

とても気分がハイになっっているらしく走馬灯が駆け巡る代わりに意味不明な言葉が頭を駆けまわっている。俺よりも先にパトラッシュが天使に連れて行かれたよ。一人にしないで、一人は寂しいから幻覚でもいいから傍にいてよ。

「大丈夫ですか？」

天使が優しく声をかけてきた。俺は天使を見つめながら「いいえ、大丈夫ではないです。でも、やっとお迎えがきてよかった」と乾燥しきった口内で干乾びた舌を懸命に動かしながら声を振り絞った。

「よかった、まだ生きてる。安心して私が連れて行ってあげるから」

天国に連れて行ってくれるなんて、やっぱり天使だった。神様とか信じていなかった俺だけど神様ありがとう、こんな優しい天使を俺のために遣わせてくれて。

私、建速三小太は死して信者になります。なんの神様かは分かりませんが天国で会えるでしょう。そうしたら私も天使として神様にお仕え申したいと思います。

視界がぼやけていく。まるで霧に包まれたかのようにどんどん白く、そして暗くなっていく。

さようなら、お父様、お母様、妹様、こんな親不幸の息子をお許しく下さい。私は天使になります。お父様、お母様が心配していた就職先は天界でした。天使になった後は天界でお仕事に励みます。これで永久就職決定です。後、大学卒業できなくてすみません。私は立派な天使にな……。

ミコトの電源はブツと強制的に途切れた。

1・マグ・メル

建速ミコト、18歳。大学一年生。運動能力は高いが学業の成績は下の中。

性格は気分屋で好奇心旺盛。他人から言われることは「何考えているかわからない」が一番多い投票結果でした。一人だけに言われただけだからこんな投票結果になっているんだけど。

座右の銘は、「漁夫の利」、「他力本願」と本人は普段から言っているが単に努力した所を人に見られるのが恥ずかしいだけである。大体一人で物事を進められる能力は少なからず持っていると言われている。困っている人を見逃せないとお節介な部分も持っている。本人曰くただ好奇心が人より高いだけで、だから、そんな気分ではない時は悠々と見逃すよ、と弁解をいれていると訂正。

そんな彼は老人が買い物袋の中身をぶちまけたのを見ていつものお節介ですぐに駆け寄り、リンゴやら大根やら缶詰と一緒に拾い助けた。お礼として転がり落ちたリンゴを受け取って家に帰ろうとした時に急に眠気に襲われ気絶した。

するとミコトはリンゴを手に持ったまま森に移動していたのだ。

いくら走っても、歩いてても、這いつくばっても、木に登って落下しても森から出る事はできなかった。

二日目に痛みで起きると左胸に赤い線で刻印のような印が刻みつけられていた。すでに全身に恐怖が刻み込まれていたので少し錯乱状態になって走り回ったけどそれ以降身体に異常はなかった。精神の異常は多少あったけれど、なんだろう、この刻印は？

一日目は発狂して錯乱状態で走り回った。

二日目は左胸に刻印が刻まれ錯乱状態で走り回った。
三日目は空腹に耐えきれずに水たまりを啜り、葉っぱを食べた。
四日目は身体が異常をきたし動きが鈍くなり天使が迎えに来てくれた。

このサバイバル生活を日記に綴るとこんな感じ。三日坊主だから四日目の日記を書くのが面倒だったけど書いておいてよかった。だって、俺の最後の文章になったのだから。あ、冗談です。日記を書く道具も日記もないんだから。

短い人生だった。もつとしたいこと沢山あったのに。あんなことやこんなことムフフなことやイヤーンなこと・・・etc。

お、天使がお呼びのようだ、行ってきます。まず目指すは大きく天使長かな、何百年かかるか分からないけど頑張るよ。よし、最初の仕事はなんだろうな。

ミコトが目を覚ますとそこは天界でも地獄でもなくどこかの部屋だった。

シートのような薄い布団からゆっくりと上半身だけ起き上がると額にあつたぬるく湿った布が床に落ちた。目は覚ましたが脳はまだ就寝中のようではげつと壁を見つめていた。

俺の脳は寝坊助さんでなかなか起きてくれない。眼球だけは元気に一点集中の超集中力を保っている。だけど目標の個人情報の詳細にできない。だって壁だもん。

部屋の外から、ギシギシ、と木製の床を踏みこむ音が下から上へとそしてこの部屋に向かってくる。

ガチャリとこの部屋の扉が開いた。そこで脳も起床したようだ。まだ完全に起きたわけではなく寝ぼけている状態だけだ。

「わっ！！びつくりした。起きていたんですね」

声のする方に首だけ回転させて見ようとするが真後ろだったので無理だった。

「無理しなくていいですよ」

声の主は俺の横に正座した。よく見ると俺を迎えに来てくれた天使の女の子だった。でも、羽も生えてないし頭上には天使の輪もなくエプロン姿に頭には三角巾を付けていた。第一印象はお店の人気看板娘。

「えと、ここは？」

「私の家です。料理屋ですけど、その二階になります」

「あれ、俺は森で迷って・・・」

「ええ、びつくりしましたよ。山菜採りに森に出かけたらあなたが倒れていたんですから。それにひどく衰弱していたから家まで引きずってきたの。お母さんは毒草でも食べたんじゃないかって言っていたけど」

「いやいや、毒草なんて物騒なもの食べるはずないですよ。青々しい新鮮な葉っぱを食べただけです。でも葉っぱ食べてから身体の調子が悪くなったような気がする。苦辛い薬草ではなくただの毒草だなんて思いたくないですけど、あんなに我慢して食べたのに。」

生きるために食べたものが毒だったという皮肉。

それと腕とか脚とかが擦り傷だらけなのを今気付いた。痛い、気付いた瞬間からチリチリと痛みが出始めた。

「えと、私はユユと言います。あなたは？」

「俺は建速ミコト」

「タテハヤミコトさんですね」

「ミコトでいいよ。他の連中も大体そう呼んでるし」

「はい、分かりましたミコトさんですね。それとお腹は減っていませんか？」

とても、とっても腹ペコぐぐぐでペッコペコです。腸が腹の中でびちんびちん跳ねまわって暴走状態でギョルギョルと断末魔の如く叫び続けていてお腹と背中がこんなにちはしそうなくらいの空腹感だね。

「かなり減ってるかな。ここ数日葉っぱと水たまりだけだったから」「ええ！？ それは大変でしたね。待っていてください今持ってきますから」

ユユと名乗った少女は一緒に持ってきた水の入った桶を置いたまま部屋から急いで出て行った。

そこで頭の中に浮かんでいる脳もようやく問題なく運動できる程に目を覚ましてくれた。

さて、ここはどこだろう。ユユって娘は料理屋の二階と言っていたけど、部屋を見た感じ木のテーブルと椅子、押し入れくらいしか家具がない質素な部屋だ。押し入れが家具に入るかどうかかわからないけど。

まあ、言葉が通じているのだから日本のどこかかっていうことは分

かり安心できた。なんで森にいたのかは分からないが。とにかく人と接触できたことが何よりも安心できた。

部屋の窓から青空が見え、外がどうなっているか気になったので体力ゲージがギリギリの状態の身体を立ち上がらせた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

窓の外から見える風景を一言で表すのなら賑やかな商店街。そう、商店街。

俺の知っている日本の風景とは違う。道には馬で荷車を引いて移動しているのが見える。馬？ 剣を背中に背負っている人がいる。剣？ 鎧を身に纏っている人が笑っている。鎧？ 人の2、3倍はある巨人と目が合い『あ、どうも』と無意識に会釈。巨人？ 空を箒で飛んでいる人が・・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

どこだ、ここ？ どこだ、ここ？ どこだ？ どう、どう、どう。
夢、夢、ゆめ、ユメ、yume。

全俺インターネットを集中しこの現状を理解しろ。

起床したばかりの脳がオーバーヒートを起こし焦げ付いた模様でエンジンの取り換えが必要と判断。まず高温状態ですので冷却します。一時布団へ帰還することを推奨します。

了解。

脳内会議を無事終了し布団を覆い被った。

「ご飯持ってきましたよー。あれ、なにしてるんですか？」

布団を被ったと同時にユユが料理を乗せたお盆を持って部屋に入ってきた。

料理の旨そうな香りで、怪盗なんとか三世みたく布団から飛び出しました。布団を被った瞬間布団から飛び出す奇異な行動を取った自分が恥ずかしい。

お盆にはご飯、唐揚げ、サラダ、漬物、お茶が乗っていた。うん、全部大好物です。はい、今は料理全部大好物です。

「余り物ですがすみません。お客様がもう少し少なかったらもっと美味しい料理を持ってきてあげられたんですけど」

「いやいや、料理を食べさせてくれるだけで満足だよ」

余り物料理も大好物ですからね。「いただきやす」と添えてあつ

た箸を持ちながら合掌した。

唐揚げを箸でブツ刺し豪快に口に運ぼうとしたが、人の前ですからと行儀よく箸で掴み下に手を添えてゆっくり口へと運んだ。もぐもぐ。ごっくん。

ああ、美味しい。衣がサクサクと中から肉汁がぶわあ、最初の衣の良い歯ごたえと後から口の中で溶けていくような肉と肉汁が喉へと流れ込む、幸せの一言。

「旨い。ああ、旨い」

涙がほろりと流れる感じがした。ユユは感想を聞いて天使の微笑みから女神の笑顔へと格上げされたかのようだった。

ユユは俺が食べている姿をずっとニコニコしながら見ていた。ずっと見られていて少し恥ずかしかったが羞恥よりも空腹の方が勝っていたので食事続けた。

もぐもぐ、もぐもぐ、ごっくん。もぐもぐ、ごっくんを繰り返しつつあつという間に完食致しました。ごちそうさまでした。ベリーベリーデリシヤスでした。ああ、ご飯最高。料理最高。かわいい娘最高。

はっ、と先程の外のビックリ仰天目を疑い取り換えようと思った風景を思い出した。

「えと、ここはどこ？ ああ、いや、料理屋の二階とかじゃなく地名みたいな。日本のどこ？」

「地名というと、マグ・メルって呼ばれていますね」

「マグ・メル？」

脳内辞書を高速で読み調べていく。日本の都道府県でマグ・メル。

日本の市町村郡でマグ・メル。日本のマグ・メル。検索中・・・
検索中・・・検索中。

検索条件に一致する項目がありません。

もう一度検索。検索・・・。。。

検索条件に一致する項目がありません。

・・・夢だ。これは夢なんだ。うん、ユメ。やっぱり、yume。そもそもさ、こんなかわいい娘が俺のためにご飯なんか持つてくるはずないんだよ。いや、てっきり騙されるところだったよ。さて、どうやって夢から覚めるんだろうか。そうだな、全力で自分を叩いて現実とリンクしよう。

掌という俺の武器に今持てる全ての力をオーラとして籠め頬に穿つ。その衝撃は計り知れないモノがあり、それは衝撃波を生み出し頬から口内へとダメージは蓄積されビツクバンが起きた。そして自分の掌でノックアウト寸前に追い込まれた俺は床に倒れた。一部フイクションがありますのでご注意ください。

「ひゃっ!? なにしてるんですか」

ユウは俺の理解不能な行動に驚いていた。俺も今の状態に理解できていないけどな。ああ、痛い。夢なのに痛いや。ははは、どうしよう。

あれ、本当に涙が出てきた。ははは、頬の痛みで泣いているのか、それともここが日本とは別のところだと知って泣いているのか、はたまた夢でないことに泣いているのかどれなんだろう。

森で起きた時から今まで異常なテンションで自分で何を言ってるかも考えてるかも分からずにいたが元の状態に戻ってきた。

「あの、ミコトさん、どうしたんですか？」

「俺さ、たぶん、いや、この世界知らないや」

「はい？」

「えと、知らないんじゃない。この世界は俺がいた世界とは違うんだ」

「ああ、はい。ミコトさんのいた国はどういった国ですか？」

ユコは世界を国へと変換して勝手に理解したようだ。まあ、そうだよ。違う異世界からやってきました、てへ。みたいに言っても信じてくれる人なんかいないな、俺がそんなこと言われたら、この人は電波ちゃんか、としか思わないな。

俺はユコに元いた世界である日本の話をした。まだ、この世界が地球以外の異世界と決まったわけではないし、どこか俺が知らない場所なのかもしれない。

そんな希望も断たれる。やっぱり違うみたいだ。

ユコの話を書く限り印象的なのは機械がほとんど存在していない、ということと魔法が存在しているということだった。

このマグ・メルの地には俺の元いた世界では日常にある、車に電車、テレビや電話等がなく電化製品はほぼ全てと言っているほどない。移動手段は馬や獣を使うと言っている。明かりについては魔法で召喚した火をランプ代わりに使っているという。

魔法についてはこの世界の住人全てが魔力を持っていて誰もが魔法を使える素敵な世界だ。しかし、余程の才能と魔法に特化した家系ではなければ杖などの道具を使用しないと魔法が行使できない。

ユコは残念ながらどちらにも恵まれなかったように魔法は全然使えず

苦手みたいだ。

種族も多種多様なようで人間、エルフ、ドワーフ、獣人、巨人等がいるようで、まさに絵に描いたようなファンタジーな世界だ。困った、困った。いや、本当に困った。日本はおるかアメリカなんかも知らないというのだからどうすればいいんだ。完全に別世界だよ、ここ。こういうのは来た時にゲートやらなんやらで異世界に迷い込むというパターンとかなら戻るための方法は見つけ出せそうだけど俺はどうやってこの世界に来たか分からない、完全なる迷子。それに召喚されたのなら召喚者が近くにいろだろう普通。

言葉が通じるだけ幸運なわけだが何故言葉が通じるのだろう。日本語が世界共通語になった英語が苦手な学生にとって素晴らしい世界なのだろうか。

とにかく、もとの世界に帰還する方法を見つけなくてはならない。どうやって？ それはRPGにもよくある冒険の旅へ出発だ。みたいな感じでなりそう。

うわあ、そういうのは嫌だなあ。

仲間を酒場で集めて店で武器防具を買って道端の悪意あるモンスターを狩って勝って狩りまくって経験値を貯めてレベル上げて魔王を倒して実はその魔王は手下で真のラスボス登場で驚きを隠しつつも挑み倒し世界を平和にして伝説の勇者になつてめでたし、めでたし。……目的が歪曲して世界を平和にするために冒険に変わっているし。やっぱり剣と魔法のファンタジー世界なら異次元空間を移動できるチート能力の持ち主いろだろう。うん、そういう人探そう。

異世界を渡れる魔法使いの搜索という方針が決定致しました。これまた、時間のかかりそうなことだ。

2・街案内 - 1

「おお、少年、起きたか。どうだ、身体の調子は？」

頭にタオルを巻いたラーメン屋のおっちゃんみたいな恰幅のよい人が部屋に入ってきて来てユユはその人へ振り向き「あ、私のお父さんと紹介した。」

「お父様でしたか。この度はお嬢さんに助けていただいております。上げますです」

慣れない俺仕様の丁寧なお礼の仕方であやうく済ませる。はて、これでよかったのだろうか。

「そんなのお互い様さ。俺等も魔族には世話になってんだ。困ったら助けるってのが普通だろ」

「魔族？」

「ん、お前魔族じゃないのか？ 黒髪でしかも黒眼つていや最高位の魔族だろ」

「お父さん、ミコトさんはこの国じゃないところから来たのよ」

「いや、それは魔族共通のはずだが、そういう人間もいるってことなのか」

二人の会話についていけず、ぼかんと間抜けに口を開けながら見ていた。

適応能力は自分でもかなり高い方だと自負する俺だけど、この問題は理解しようとするればするほど底なし沼のように理解できず溺れていくしかない。単純なバカな俺は理解という理性よりも感覚という本能で解決するほかない。

「俺も黒髪黒眼を見たのも久しぶりだったからな。もう20年くらいになるのか」

客も少なくなつて暇になつたおっちゃんがしみじみと昔話を始めた。かなり美化された内容だと聞いていてすぐに分かったので簡単に整理しておいた。

このマグ・メルは魔王が王として君臨する王国である。死者の森という所を抜けた先にある魔王城に住んでいると言われているが実際に人間でそこに訪れた者が存在しないので分からない。その城に住む魔王は毎日のように街を訪れ民衆と戯れ共に仕事を手伝うという、いつも笑顔を絶やさない好青年であつた。

その魔王が魔族最高位の証である黒髪黒眼の持ち主であつた。

おっちゃんも当時は若く魔王と共に野獣や盗賊を懲らしめていたらしい。

しかしその魔王も20年程前から街を訪れなくなり姿も現す事もなくなつた。魔王城へ行こうかとおっちゃんも挑戦したが死者の森はそれを拒んだ。名の通りその森は死者か魔族しか通れない強固な結界が張られた場所だつたのだ。魔力にも恵まれず腕っ節しか取り柄のなかつたおっちゃんは諦めるしかなかつたという。

そんな話を聞かされること小一時間。おっちゃんは下から聞こえる怒声で顔を真っ青にさせすぐさま部屋から脱兎の如く飛び出していった。

「お父さんはお母さんに弱いのに」とユユは笑顔で言う。

なるほど。あのおっちゃんの表情の変わり様を見たら人間に呼ばれたって感じではないと思っただが、あれはお母様のお声でしたか。そんなことを口外すると事は悪い方向にしか進まないのだから思っただけのことではなさそうです。

それよりもおっちゃんが話していた黒髪黒眼の魔王のことだ。会話の途中でユウは俺が倒れていた森が死の森だと説明してくれた。その先に結界に覆われた不可侵の魔王の城がある。

関係無いわけじゃないか、これは偶然じゃないだろ。俺がこの夢伽話のような場所に強制的に送られた原因が死の森の先にあるはずだ。

しかし魔王の城に行く手段がない。

誰も行った事のない場所へどう行くのか。何日彷徨って森からも出られなかった俺が行けるとは思えない。結界という厄介な防御手段を持つこの異世界は現代の常識は通用しないみたいです。

「ミコトさん大丈夫ですか？ まだ具合が悪いのなら休んでいてください」

「大丈夫、いつも使わない脳を使っているからそう見えただけだよ」
ユウの優しさに涙腺ダムが決壊しそうになります。

普段はまったく何も考えず自堕落にのんびりと過ごしてきたから、いざ自分で何かをしようと思おうとしてもアイデアが出てこないし行動もできない。

情けない自分を改めて思い返すと後悔が沢山溢れ出て来る。これは負と鬱のスパイラルに陥ると感じ、窓から見える現代世界と変わらない青空を眺めた。

青空は同じだけど飛行しているものが違う。翼の生えた人が飛んでいたたり、棒状の道具に跨った人が飛んでいたたり、もう人じゃない

生物が飛んでいたりとシユールだ。

「外が気になりますか？」

「ああ、うん。ここ全然知らない場所だからね」

「でしたら案内しましょうか？」

「いいの？ 店の手伝いは」

「大丈夫ですよ。今の時間帯はお客さんの出入りは多くないですから」

「助かるよ」

本当に助かる。一人じゃ知らない場所をうろつくのは怖いから。

弱った体を再び立ち起こして部屋からユユと一緒に出る。

音のよく出る木製の階段を下りるとすぐ厨房があった。そこでおちゃんは片手で軽々と大きい中華鍋で野菜を炒めていた。

「お父さん！！ 外出てくる！！」

「おお！！ 行って来い！！」

厨房の騒がしさで普段の声の大きさでは通らないためユユは叫ぶように会話した。

店には2、3人の客が残っていて皆ユユを見ると一言かけていた。それを後ろから見ている俺は初対面でも話しやすいし優しいから親しみやすい人気がある娘なんだなと思った。

店から出ると外は賑やかだった。人々の声と足音が活気を出している。

「あら、もう具合はよくなったのかい？」

店前の花壇に水をやっていたユユと同じ服装をした綺麗な女性が

話しかけてきた。ユユをもっと大人っぽくした容姿でこの声はさつき聞いた覚えがあった。

ユユは「お母さんだよ」と説明してくれたが、その前にすぐにユユの母親だと分かった。

「おかげ様で助かりました」

「何そんな硬いお礼言っんだい。別に私は何もしてないよ。で、今から出かけるのかい？」

「うん、ミコトさんに街案内するの」

「ミコトって言うのか君は、私はリリー、この娘の母親だよ。よろしくね」

リリーさんはユユと同じ笑顔を作って握手をした。その手は小さく柔らかくて温かった。

「あ、今から出掛けるんだよね。なら、お使いを頼むよ。ちょい待ってて」

握手をしている最中にリリーさんは思い出すかのように言っただけの中に入っていった。すぐに怒声が聞こえたがユユが言うには「いつものこと」だそうで気にしないようにした。

手に紙を持ったリリーさんが店から出てきてユユにその紙とジャラジャラと中で硬貨がぶつかる音をさせる袋を手渡した。

「そこに書いてあるのを頼むよ」

「分かったよ。じゃあ、ミコトさん行こう」

ユユと街案内ついでのお使いをすることになった。

ユユの家である料理屋に沿っている道はこの街一番広い通りだ。

そして街一番の商店通りでもある。

見たことのない店の軒並みが連なり2、30メートルくらいある道幅に様々な人々が闊歩する。

よく見ると猫耳の人やら兎耳の人が普通に歩いていた。ミコトは、これはコスプレタウンか！？ となぜか興奮していた。

ミコトは自分の想像していたファンタジーの世界と同じで初めて見るものばかりがありテンションが上がる。

フードを被った怪しい人やボロボロの鎧を着た人や獣姿の人等が横切るとついつい目で追ってしまふ。

それでも実感はまだ湧かない。こういう光景はテレビやらで多少見慣れた光景であった。現実でもこういう格好で普通に歩く光景があるおかげもあってかそれほどギャップがないことで驚いている。しかし、これらは虚構ではなく事実なのだ。コスプレイヤーではなく本職なのだ。

ユウは紙を見て立ち止まる。

立ち止まった前には紫を基調とした店が立っている。

店名は・・・知らない文字だ。読めな・・・くない。知らないけど見たことないけど、それが文字だと理解できていた。その文字の意味も理解できた。

ルキユールの魔法道具店。

「えと、ここは魔法具屋さん。お母さんのから頼まれたものがあるから少し時間かかるけどいい？」

「へ、あ、いいよ。魔法具屋なんて初めて入るし中で見てるよ」

文字を見ながら疑問を抱きながらも店に入った。

3・街案内 - 2

不気味で不審な外観の店だったが中は一転して明るく綺麗な内装を施していた。外装と内装のギャップがあり、これはこれで怪しい感じが漂う。

棚には水晶や宝石の結晶のような綺麗なものが淡く輝いて鎮座している。触ったらずくに壊れそうで怖いので眺めるだけにする。

テーブルの上には大中小の様々な木箱が蓋を開けた状態であり、中身は杖や何かの動物の牙か角が詳しくはわからないものに見覚えのあるフルートや角笛のような楽器まであった。

どれも骨董品みたいでとても高そうに見え触れたら嫌な予感しかないのもこれらも眺めるだけにする。

いや、全てのものに接触するのは止めよう。我が日本にはこういうことわざがある。触らぬ神に祟りなし、だ。

ドン、と背中になにか巨大なものが当たりその拍子で木箱の中に手をつ突っ込んでしまった。

手の平から伝わる崩壊音。

手を木箱に入れたままで硬直する。それを聞くのではなく感じた俺はぶつかつた背中に冷風が吹きぬけ額からはべっとりとした脂汗が滲み出していた。

「すまない。大丈夫か？」

背後から聞こえる低いながらもまだ若さが残る声が俺を硬直から解き放ち、ギギギギと機械が首だけをゆっくり回すような動作で振り向く。

おそらく俺の表情はひどい顔をしていたのだろう。地面にまで達するロングフードを着ていた巨躯の男は俺の顔を見て驚いていた。それとも引いていたと言った方がいいのか。

「なあ、これどうしてくれるんだ？」

もう一度現実逃避したい木箱の中身という現実に視線を戻して男に言う。中身である古そうな杖は複雑骨折という重体患者になっていた。

「お前！！ 魔王か！？」

巨躯の男は俺の顔を両手で掴むと瞼を無理やりこじ開け鼻と鼻がキスする寸前まで近寄って確認し終わると乱暴に髪の毛を掻き回す。

「お前が魔王か！！ いきなりなんだよ、急にぶつかってきて次に無理矢理のスキンシップかよ」

「何を言っている。この髪色、この眼色、それに青年。そしてこのマグ・メルにいるということは魔王唯一人。お前に会うためにこのような危険災害地区まで来たのだ」

男は俺の両肩を掴み揺さぶる。何この人、怖い。

「俺は魔王じゃない！！ 離せ！！ 俺だって魔王に会いたくないんだ」
「なっ！？ 人違い、なのか。いや、それでも魔族に変わりはない。魔王の場所を」

「だから、俺は人間！！ 魔族じゃない。俺だって魔王に会いたくないって言ってるだろ」

男は信じられないような引き攣った表情を残しながら肩から手を

離れた。

「ミコトさんどうしたんですか？」

この店のお使いを済ませたユユが怪訝な表情で俺と男を交互に見比べる。周りを見回すと他の客もこちらを凝視していた。

「いや、なんでもないよ。行こう」

俺は木箱を男に押し付け店を早足で出た。ユユの表情は何が起こったかわからず眉の間に皺を作っていた。俺も何が起こったか全然分からない。ただ、表面上では強気に出ていたが内面ではかなり怖かった。

あの男も目的は魔王を探すことだったのだろう。でも店の物品を壊した焦りと男の勢いで冷静になれなかった。今更引き返すのもできない。あの壊れた杖を弁償することになるのはあの男なのだから。これからは気を付けなければいけない。ここは平和な日本ではなく、よくわからない異世界なのだ。無暗に人と衝突するのは避けたい。

通行人を見ると武器を持っているのが大半だった。日本では銃刀法違反に一発で触れることもここでは日常で同じように思っていない。もし、あの男がチンピラみたいな奴だったら俺は路地裏に肉塊として捨てられていたかもしれないと思うとゾツとする。

ユユはあの男との事を深く聞いては来なかった。これで印象が悪くなったなと自分の運の悪さと行動に後悔した。気まずい雰囲気はブンブンするぜ。

それも杞憂に終わった。次の案内場所まで言葉が紡がれなかったが着いた途端ユユは笑顔でここは薬材屋さんと説明をし始めた。

ユユの天真爛漫さはそんなことで気まずい雰囲気なんか作り出し

はしなかった。俺がネガティブに考えていただけだ。

普段、考えるという人間が培ってきた英知を使うのを止めていた俺がここにきて無理矢理使うものだからおかしくなっていたみたいだ。

突然ユユが振り返り頭上に電球がピカツと光るエモーションが見える錯覚をした。

「そうだ、魔族の人に聞けばいいんですよ。普通の人なら駄目だけどもミコトさんなら大丈夫かも」

「何が？」

「私、閃きましたよ。あの森でミコトさんが倒れていたのには理由があるはずです。しかもあの死の森の先は魔王城があるというじゃないですか」

うん、俺はそれを最初に気付いていたけどね。その森をどうやって抜けるかを考えていたんだよ。

その魔族が本拠地ともいえる魔王城にホイホイどこの馬の骨とも分らない奴を案内するのかという大いなる問題があるんだよ。

ユユは「心当たりがあります」と言っただけで煌く笑顔で俺の手を引っ張った。ふむ、リリーさんの手よりも小さくもつと柔らかい。

人ごみを蛇行するようにすり抜けスムーズに進んでいき辿り付いた店が総食料素材屋。つまり八百屋とか鮮魚屋が集まった市場が一つの店になったような巨大な商店だ。

そこにユユの心当たりがあるという。

話を聞いてみると魔族全てが魔王の城を知っているわけではないそうだ。この街に住んでいても魔王と関係する魔族はいないらしい。ならば何故この場所に来たのかと言うとここに食材の補給に魔王

城に住んでいる使用人が度々訪れるのだ。いつ来るかはわからないが運が悪ければ数ヶ月は出会う手段がない。

店の中はまさに市場という風景だった。所狭しに食材が詰められどンドン売り捌かれていく。声が一切途切れない騒がしく活気に満ちた場所だ。

ビチビチと元気に跳ねる提灯アンコウのような魚と目が合う。助けてくれ、という痛々しいテレパシーがビシビシと伝わってくるような気がする。そのアンコウも金によって売買され連れて行かれた。

美味しくしてもらえよ。

「ミコトさん、使用人さんがここに来たのは結構前らしいですよ。あと数日か数週間の内に来るだろうって」

「そうか」

「もし、来たらエンダーさんが連絡してくれるそうです」

エンダーとはこの商店を取り仕切っている店主だ。

今ここにその使用人がいると期待したがそれほど上手く事は運ばないようだ。しかも数日以上はかかる。それまでに他の方法も考えなくてはいけない。

希望がないわけではない。手伝ってくれる人もいるし出だしはかなり幸運な方だ。

その後は紳士らしく全て俺が大量の食材や道具を抱えながら案内してもらったが疲れて全く耳にも視界にも入らなかつたが楽しそうなユウを見ているとここに来て満更嫌ではないと思ってしまう。

ああ、なんて俺は楽観的で。なんて俺は馬鹿なのだろう。

4・手掛かり

元の世界に帰還する方法を探すという問題の他に大きな問題が立ち塞がる。住む場所がないのだ。もちろんこの世界の通貨なんか持っているはずもない。

案内を終えてユユの家である料理屋ファルシに戻ってきて辛気臭く途方に暮れていた俺におっちゃんが「どうした、少年!!」と話しかけてくれた。

寝床がないことや帰りたいたいけれど方法が分からない等を話すとおっちゃんは豪快な笑顔で店の手伝いをするという条件を出して、こんな俺みたいな胡散臭いよくわからない奴の宿泊を快く許諾してくれたのだ。なんと心の広い方達なのだろうか。目頭が熱くなります。知らない初対面同然でも人つてこんなにも親切で優しくできるものなのかと信じられない感情があった。俺だったらと考えるとキリが無いからそういうことは考えず他人の親切心をそのまま受け取ることにした。

俺は料理屋で働くことになりました。

料理屋ファルシは三人家族で切り盛りされている。一人娘であるユユはウェイターや食材調達、時には調理もする万能看板娘。ユユのために来るといふ常連もいるから人気は計り知れないものがある。父親のおっちゃん（フォーカスという名前だがおっちゃん固定）は店主兼料理長。おっちゃんの料理はどれも美味しく勉強になる。母親のリリーさんは経理を担当。用紙にはびっしりと数字が書かれていて驚いた。電卓があればもっと楽になるのだろうがこの世界に存在しないことを言っても仕方ないし機械のことは全然わからないからどうしようもない。

皆優しく俺は安堵した。

そして日々は過ぎる。

なにをしても、なにもしなくても陽は昇りそして沈み、月は輝き淡い光で大地を照らす。それはこの世界でも変わらない。ただ繰り返すだけの日々。この世界に来て数日があつという間に過ぎた。月光が差し伸べる部屋でぼくと窓の外を眺める。

ふと、元の世界での生活を思い出す。あれは自堕落で何も考えずなにも心からやりたいという夢もなくただ生活していただけの日常が俺の幸せだった。両親も妹もいてこれまで何不自由ない人生。

これまで全て誰かに頼ってきた。ただ一人で生きるってことが俺にはできないとこの数日で確信した。

苦しい。

人に頼ることが、人の優しさがこんなにも心の負担になるなんて思わなかった。

無意識に涙の小粒が頬を伝う。何度も何度も伝う小粒の涙はやがて一本に繋がった。この数日に溜まっていたものが涙という形で表れる。

「帰りたい」

押し殺していた声から聞こえた自分の本音。俺には帰らなければいけない場所がある。

平凡な日常だったけどあの世界が俺のいるべき世界だ。ここは違う。

うずくまりながらしばらくの間溢れ出る涙は止まらなかった。

翌日、寝不足ながらも店の手伝いはしっかりと取り組んでいた。

客足の一番人が多い昼時も過ぎて今は常連の人達が数人残ってい

る程度だ。

ユユの閃きから数日が経過したが一向に店主から連絡は来ない。しかしただ連絡を待つだけではなかった。自分なりに常連の人達に伽話としてそんな実例がないか等聞き込みをしたり大聖堂にある図書館で書物を漁ったりしていたが未だに解決方法は見つからない。他には行方不明者が最近多くなっていることや街の外に魔物が大量発生とか俺には直接関係がありそうでないことが起こっているくらいで進展は残念ながらない。

椅子に座って頬杖をついているとバサバサと鳥が羽ばたく音が俺目掛けて突っ込んできた。

「うおおお!! なんだこの鳥は!!!??」

「エンダーさんのところの使い魔だ!!」

ユユがそう言っただけで灰色の体色の鳥を掴む。よく見ると足に紙が付けられていた。それをユユが嬉しそうな表情で取って見る。

「・・・ミコトさん!! 魔族の使用人さんが来ているって行くところ!!」

「本当か!? あ、でも店は」

「少年、行って来い。今の時間は大して客もいない」

おっちゃんに背中をおもいつきり押されて体勢が崩れたが立て直しユユと一緒に総食料素材屋に向かった。

店主に紹介された使用人は本当に使用人らしい格好をしていた。レース付きのカチューシャにはつきりと体の見事なラインの凹凸がシルエットとして見えるフリルの付いた白黒のエプロンドレス。ま

さしくリアルメイドさんだった。

他にも変な格好の人達はあるのだが圧倒的存在感で一人浮いている格好だった。

「あの、魔王城の使用人さんですか？」

「そーですよ。私は使用人をしているイーシエといいます。それで私に用件とは？」

イーシエはユユの質問に軽く答えて黒色の髪を掻き揚げて紅い瞳でこちらを伺う。質問したユユではなく俺の方を見ながら、お前が質問しろ、というように。

「魔王城に行きたいんです。案内してもらえませんか？」

「その黒色本物？」

「そうですけど」

「・・・そう」

紅い瞳は冷たい視線を送る。感情の籠っていないただの言葉。その言葉は続く。

「残念ですけど私に案内しろって言うても無理ですよ。私はただの使用人なんですから」

「俺は魔王城に用があるんです。そこに俺が帰る方法があるはずなんです」

「ああ、そうなの。あ、いや、そうなんですか。でも私達にそれは関係ないことですし貴方がどうなるかなんて知りません」

冷たい言葉が突き刺さる。優しさに甘えていた俺には厳しい言葉だった。

所詮他人から見れば俺の事情なんかどうでもよく他人事なのだ。

「お願いします」

頭を下げ乞う。

「困ったな、二人とも頭上げてくださいよ。無理なものは無理なんですよ。これまで城に案内した件は私含め一切ないですしあれです、今回以降ご縁がないってことで」

二人？ そうか、ユユも一緒に頭を下げているのか。

こんなところで引けない、引けるはずがない。せつかくの希望をみすみす逃すか。頭を下げ続けて同じ言葉を繰り返す。「お願いします」と。

イーシエは俺の肩を掴んで起こした。紅い瞳と目が合う。それは深く美しく宝石のような輝き。

諦める。

突然体から力が抜け膝をついた。なにかが体から抜けていく感じ。

「ミコトさん？」

「では、これにて失礼します」

「・・・そんな」

ユユの口から空気が抜けるように出たのは絶望を含む言葉。膝を付いたまま放心状態の俺は思考が停止していた。

虚脱感。情報が入りしない全てが真っ白になっていた。そんな状態がいつまで続いたのだろうか。気付いた時には俺一人だけだった。

記憶がトンでいて何をしていたのか思い出せなかった。頭痛がす

る頭を押さえながら料理屋に戻るとおっちゃんが厨房から顔を出してきた。

「少年どうだった!? いい情報はあったか?」

俺、何してたんだっけ?

「ユユはどうした? 他の使いが残ってたか?」

ユユと何してたんだっけ?

「あいつ心配してたぞ。少年が夜に泣いていたって。あいつは面倒見がいいからあんま心配かけるなよ。相談ならいつでもものってやるぞ」

あれを見られてたのか、恥ずかしいな。みんな心配してくれてたんだ。

それで俺はユユとあの店で何をしてたんだ。思い出せ、さっきのことだろ。思い出せ、何を話した。思い出せ、誰がいた。思い出せ、何のためにいたんだ。

頭痛が止まり、モヤモヤとした違和感が取り除かれる。

随分とあっさりした感覚だった。鍵が外れたように記憶が戻る。

思い出した。

なんで記憶が無くなってたのか分からないが簡単に戻ったので今は気にする必要もない。

俺になにも残さずユユがいなくなったってことはあのイーシエというメイドに連れられたか。いや、わざわざ連れていくわけないだ

ろう。他にはユユは尾行していった可能性もある。あのメイドがユユに危害を加えないという可能性もないわけではない。逆に大いにあるだろう。

ユユのことだ。俺の帰る方法のためにメイドについて行って魔王の城の場所を見つけようとしているのだろう。

なら、どこにむかったか場所は分かる。もし、違うのなら別に問題はない。

早く死の森に行かなくては。

5・まおう登場

死の森までの道は既に知っている。

今回は迷わないように木と地面に目印が残るように木を付けながら進んでいく。

「ユューー!!! どこだー!!!」

腹の底から叫ぶ。何度も繰り返し、喉が疲れようが息が切れようが叫び続ける。

時間は刻々と経過し陽が沈み始める。

もうすぐこの森は闇に包まれる。それでは残した目印も見えなくなってしまう。また遭難なんてことは嫌だ。

でもユユを見つけなければ。どうする、ここで帰るか。いや、ギリギリまで探そう。

木に手をかけ痛みが走る喉を休ませているとカサカサと葉を踏む音が近づいてきた。

ユユか、それとも別の。

音の方向に顔を出すと目の前には綺麗に整った顔立ちでかわいらしい女の子が立っていた。風が彼女の白いワンピースを揺らめかせる。背は160cm前後くらいで歳は俺の少し下くらいか、絶対に年上には見えない顔立ちと雰囲気だ。

少女はニコツと微笑んだ。

「見つけた。やっと」

見つけた? いやいや、俺は彼女とかくれんぼをしている記憶は

ないし、彼女とは初めて会ったのだから俺には全く面識はない。

今は俺がユコを捜しているのだから知らない娘に俺が見つけたも仕方がない。

この世界に来て人から恨まれることもしてないし、捜索されるようなこともしてない。

何にもしていないのだから。いや、ちがうな。何にも出来ないのだから、が正しいのかな。

少女が満面の笑みで近づいてくる。うん、かわいい。見た目はかわいけど、なにか違和感がある。なにか、雰囲気というかオーラというかなんだらうか。漫画みたいに相手の気なんか分かるはずないのだから気のせいかもしれない。

手を伸ばせば触れられるくらいの距離まで少女は詰め寄って来た。

少女は再びニコツと微笑んだ。俺もそれにつられ笑顔で返そうとする前に突き飛ばされた。

両手で張り手をされ俺は地面に格好悪く背中から転んだ。少女の力とは思えない程の威力で驚き、腹の衝撃と背中への衝撃がコンボを生み出し一瞬だけだが呼吸ができなかった。

いきなりのことで文句を言う前に少女を見上げた。笑顔だ。とびつきのかわいらしい笑顔。悪気は一切ない無垢な笑顔。そうまるで、子供が楽しそうに遊んでいる時の無自覚な笑顔。

あれ、それじゃ今俺は遊ばれているではないか。

「ぐわっ」

アヒルの声ではない。俺の肺から抜けた際に出た恥ずかしい声だ。少女がいきなり俺の腹に馬乗りをしてきたのだ。

重かったのは最初に押し掛かれた時だけで馬乗りの状態では随分と軽くほとんど圧迫はされていない。これで小泣き爺の如く石の

ように重くなられていたら、車に轢かれたヒキガエルと化した惨殺死体が転がっていただろう。

両掌で俺の頬から顔全体へと弄ぶ少女。ぐにぐにと手の腹で頬を押され頬が千切られそうと思うほどに抓られる。

「痛い！！痛い！！」

さすがに痛すぎて声が出る。少女は不思議そうに首を傾げて俺の顔から手を離れた。

「えと、君は誰？」

まず、どいてくれ、とかでなく俺は自己紹介を促した。

「会いたかった。ずっと、ずっと」

残念ながら会話が成立していないようです。相手の言っている意味が分かるからこっちの言葉も通じているはずだよな。

少女の顔は笑顔を残したまま目から涙を零していた。

シャツを掴まれぐいっと引つ張られる。胸倉を掴まれている体勢になり不良少女に脅されているような情けない格好に周りから見えるだろう。周りに誰もいないけど。

顔が近づくと、少女の肌はシミ一つなく綺麗で眼は潤んでいて輝いている。

俺は今の状況がいまいち理解できていないのか緊張なのかドキドキしていた。

一人でドキドキしていたらシャツを引き裂かれた。少女はバリバリとシャツの繊維を乱暴に無理矢理引き裂いて用済みとなった布を放り投げた。

上半身裸となった俺の左胸の刻印にぺたぺたと触れる。指で刻印

を撫でるようになぞる。

まだ心の準備が、とお気楽に少し、ほんの少しだけ興奮した俺。

「やっぱり、やっぱり。私の運命のヒト。会いたかった。ずっと、ずっと」

運命のヒト？ それ、人違いです。昔占い師に俺の前世はシイタケって言われたからね。もし転生前に結婚を誓い合った仲で来世では絶対に幸せになるうね、と約束していて悲劇の別れをしていたとしても俺、前世シイタケだから人違いだよ。

強く少女に抱きしめられる。

とても強く。強すぎ。無理、痛い。激痛。背中がミシミシいつてる。少女の顔が胸にうずくまり両手は背中であつちり腕ごとホールドされているため引き離せない。ギシギシ、ミシミシと背中が、腕が、内臓が悲鳴をあげている。

これ、冗談じゃなく本気で痛い。冷や汗が出てきた。

「がつ、ああ、ああ」

声が出せない。肺が潰れそうになる。胃から逆流しそうになる。このままでは背骨が砕ける。腕が折られる。やばい、やばい。殺される。圧殺される。

逃げないと。これはまずい。美少女に抱かれて死ぬのはまだ早い。俺は足をばたつかせる。唸る。身体を捻るの攻撃を行った。それでも少女は止めない。効果はないようだ。もっと強く抱きしめてくる。

「はあ、なしてえ、くれえ」

情けない声を途切れさせながら必死に出す。

骨が軋み歪み少しずつ確実に耐久値が減らされていく。もし体力

ゲージがあるのならばもう残り少なく赤く点滅しているだろう。ゲームオーバーまであと少し。死因は美少女の抱き付きによる圧死。幸せなのか不幸なのか、悩みどころだ。いやいや、正常になれ俺。悩むまでもないだろ。

脚を大きく振りかぶりその反動を起点にして全力で身体を捻らす。ぐるんと回転して立場を逆転させる。回転させた際に地面に押しつけたために少女は「ふぎゅ」と声を漏らした。

ホールドが一瞬緩んだ隙に脱出を試みて地面をごろごろと転がった。3,4回転したところで腰から少女の手がやっと離れ急いで立ちあがり無意識に少女と距離をとった。

「いててて、君はなんだ？ 人違いじゃないのか、俺は君を知らない」

痛めた腕で腰痛となった腰に手をあて前屈みの姿勢で少女に尋ねた。

「うっん、あなたは私の運命のヒト。私の会いたかったヒト。私が待っていたヒト。私のモノ」

おい、最後、最後がモノになっている。

少女は埃で汚れた白いワンピースをはたくこともせず立ち上がり、ゆっくりと一歩ずつ近づいてくる。俺は一歩ずつ後退しているため距離は変わらずに保っている。

顔はかわいいのだけどこの娘、雰囲気がすごく恐いんだけど。近寄られてまた抱きつかれたら次は本気で殺される。おそらくこの娘は加減をしないのだろう。

まともな会話ができない電波ちゃんなのだろうか、それならば関わりを作ってはいけない。ひとまず逃げる事を瞬間的に決めた。

とにかく街に戻ってユユが帰っているかもしれないのでおっちゃん

んの店に帰ってユユの手料理で腹を満たしてこの娘のことを忘れよう。そして元の世界に戻るための方法を探す。それが一番いい選択だ。

後ろを振り返って全力で駆けだす。真後ろが街へと続く道だったからちようどよかった。目印はちゃんと付けているからね、二度と森で迷子という失態はおかさないよ。

走る、全力で自分の限界を超えて走る。気のせいだけ。
走る、走る、走る、走る。はし・る。

そして異変に気付き歩く。あれ、ここさっきのところ？

地面にはさつき、少女と転がりあった跡が残っていた。目印にしていた木もあるのだから気のせいではない。困った、実に困った。最悪だ、これでは帰れない。

フラグ回収早すぎです。お疲れ様でした。

突如首筋に息がかかった。一瞬全身が痙攣したかのように驚き、全身には冷や汗が滝のように流れ出す。瞼は限界以上に開いて眼球が飛び出しそうになり、口から心臓が吐き出る寸前。表現をするために言い過ぎたけど、それぐらい驚いた。

後ろをばつと振り向くとそこには先程の少女がニコニコと微笑みながら立っていた。

「!!!!!!!!!!!!!!」

腰が抜け地面に尻もちをついた。俺の触れただけで粉碎するガラスの心が完全に砕かれた。もう無理、もう無理、女の幽霊、呪われた、殺される、連れて行かれる、恐すぎ、恐怖、お化け嫌、震えが止まらない、動けない、逃げられない、潰される、無理無理無理無理無理無理無理、あがっ(心の中で噛んだ)、ががががががが。

俺はホラーが一番苦手だ。もし、幽霊のいる学校に閉じ込められたらまず真っ先に発狂して幽霊に最初の犠牲者にさせられる自信があるほどホラー系は天敵だ。

ああ、俺の人生はここまででした。お父様、お母様、もし、元の世界に帰還できたら必ず親孝行します。ですがそれもできないようです。すみません僕は親よりも先に死んでしまう親不幸な息子でした。あれ、これってデジャブだ。

諦めモード全開のネガティブ状態になっていると少女は逆に笑顔モード全開のポジティブ状態だった。

「追いかけてこはもうお終いなのか？」

はい、全てお終いです。逃げられませんが、恐怖で涙が出てきた、もう嫌だ。ガクガクと震えながら頭を上下に振る。

「むう、まあいいか」

少女は強引に俺の手をとり引き上げ立ち上がらせた。それはもう、かわいらしい少女の力ではなくムツキムキの力自慢の男のパワーのようだった。ちなみにそんな男に手を握られ引つ張られたことはない。

すぐに手を振り払い少女を拒絶すると少女は首を傾げて不思議そうな表情をしている。

「ん、どうしたの？ 手を繋ぐの恥ずかしかったの？」

これはなにかおかしい、ただの恐怖だけではない。この小さな少女の威圧感が圧倒しそれを増幅させる。

恐怖と緊張で声が出ない。小刻みに震える手を握っても今度は拳全体が大きく震える。脚は貧乏揺すりをもっと派手に大袈裟にして

いるかのように震えてまともに立っていられない。過呼吸のように息を吸って吐いてを繰り返す。

俺の知っているヒトではない。この娘はヒトじゃない。ヒトだけどヒトではない何か。

瞬間的に駆け巡る言葉、言葉、言葉。

この世界はファンタジー。ヒトに似たヒトがいるのもありえない。それが目の前にいる少女。見る。この少女を。

何故気付かなかった。何故そんなことに思考が届かなかった。

この少女は黒髪黒眼じゃないか。

「えい」

女子が慣れないサッカーボールを蹴るようなフォームで俺の左脚をへし折った。片方の重心が破壊され真横に肩から崩れ落ち地面を転がるように悶える。

「ぐううううあああああああ！！！！！！！！」

倒れ悶え苦しむ俺に少女は笑顔でもう一蹴、右脚を蹂躪され骨と肉の一部が粉碎される。

なにが起きた？

左脚は少女によって膝の上に関節を増やされ真横にくの字を描いている。右脚は脛脛を踏み潰され筋肉も骨も少女の靴底の形に一部分だけミンチにされていたけれど、そんなのやられた俺は痛みで説明なんかまともにできやしない。ただただ声を出して激痛に対してアピールすることしかできない。

人間は脚だけ潰されても気絶まで陥らないように俺は鮮明とした意識下で脚の痛みを絶叫という誰でもできる方法でアピールタイム中なんだが少女は笑顔を崩さない。ニコニコ、にこにこ、ニコにこ、微笑んでいる。罪悪感は一切なしの天使の笑顔。穢れもない天使の微笑。俺には天使にはどう考えても見ることができず悪魔か魔王に見えた。

涙が溢れて流れ出してきた。人前で泣くのなんて何時振りだろうかと悩んでしまうくらい久々の出来事だった。あ、ユユの前で泣いたのを忘れていた。ついでに鼻水も垂れているが恥ずかしくてこれ以上俺の醜態は表したくない。

あ、右腕にもう一つ関節を増やされた。

う、腹部激殴打。胃に貯蔵されていた俺の栄養となるはずだったモノ共が口から逃亡したようだ。

蹴られた。踏まれた。歪曲した。圧縮した。折られた。壊れた。曲がった。潰れた。砕かれた。殴られた。吐かされた。破壊された。激痛、激痛。激痛、激痛。激痛、激痛。激通。ビクン、ビクン。ひん曲がって、微塵にされた脚が痙攣する。ビクン、ビクン。砕かれて、殴られた身体が痙攣する。

森に響く悲鳴、絶叫はすぐに止んだ。

俺は口から白い泡がぶくぶく吹き出る。カニさんみたいにブクブク。身体は痙攣している。サカナさんみたいにビチビチ。

「これで、看病もできるようになってよかった、よかった。さて、帰ろうね」

少女の一言が聞こえる前に既に俺の意識は吹っ飛んでいた。

6・はっ、夢か

意識が覚醒する。

瞼が開かないだけで周りの音、布団の重み、身体の温度、いつもなら気にもしない細かな事も鋭敏に感じ取れる。

ドアを開く音と同時に「失礼しまーす」という軽い声が聞こえてきた。

「ありゃ、まおう様がないや。どこ行ったのかな」

まおう様？　って魔王か！！

瞼が開かないだけでなく、身体全体が金縛り状態になっているのか全く動かせなかった。

「ん〜、誰もいないよね〜」

布団に重み加わり、次に頭の両端が沈むのが分かる。サラサラとした一本一本が細かく繊細な髪が顔に触れフルーツのような爽やかな匂いが髪と共に鼻を撲った。甘い吐息が耳元で囁くように何度も繰り返す。

暗闇で人の形が想像で形作られる。

胸に柔らかいもちもちした物体が重く押し掛かり、瞼が通常の倍は開き眼球が飛び出るのではないかと思った。

その眼球から得られた情報は漆黒の艶やかな髪に深く魅入られる紅い瞳を持った美女だった。

頬は紅潮していて開かれた口からは鋭く尖った犬歯が唾液で輝いていた。

「あ」

首に狙いを定めていた彼女と目が合う。

それは刹那の時だったかもっと長い沈黙と硬直だった感覚だ。

「えっと・・・おはようございます」

メイド服姿のイーシエは少し引き攣った無理矢理の笑顔で言いながらベッドから降りた。

「ははは、今起きました？」

「あなたがここに来る少し前からかな」

「・・・最初からってことですね。いや、狸寝入りが上手なんですね」

「いやいや、それほどでも。ところで何故俺に夜這いを？」

「それはですね。あなたの血がとても美味しそうに感じましたので寝てる隙にガブツとちゅ〜っと」

「お前は吸血鬼かよ!!!」

「ええ、よくわかりましたね。そうです私が吸血鬼です」

イーシエは店で会った時とは別人のようにノリが良くケラケラとよく笑う娘だった。

それにただのツツコミだったのが本物の吸血鬼だったみたいだ。あれ、吸血鬼って陽に弱かったんじゃないっけ？ あの時太陽が元気なお昼過ぎだった。

吸血鬼って悪役のイメージなんだがこの娘を見るとイメージが崩れる感じがする。

あ、そういえば。俺が森に向かった理由はユユ探しだったのを遅れながら思い出した。

「ユユは、俺と一緒にいた女の子はどうした!？」

「あの娘ならしつこくついてくるのでちょちよいと家に帰しておきましたよ」

「帰した？」

「はい、心配無用ですよ」

イーシエの紅い瞳が妖しく光る。吸血鬼って魔眼っていうファンタジー能力をたしか持っていったな。なるほど、俺があの時記憶が吹っ飛んだのもこの悩ましげな眼のせいだったのか。

あと俺がここにいる理由だ。

あの可愛い悪魔のような女の子に俺は襲われて。あれ、襲われて足がぐちゃぐちゃにされて腕に関節が増えて。

腕を見る、無事だ。足を見る、無事だ。どうということだ、これはあれは幻だったのか、それとも幻覚を見せられていたのか。

それともう一つここはどこだろうか。豪華に装飾された部屋に高そうな家具が並べられている。今俺の寝ているベッドもすごくモフモフしている。イーシエの胸も同じくらいモニュモニュしていた。

「ここはどこだ？」

「貴方の目指していた魔王の城ということになりますね。まさか貴方が来るとは思いませんでしたよ」

魔王の城。ここが俺の目的の場所。俺の帰る方法がある場所。

あっさりあつという間に来たが問題ない。順調なことはいいいことだ、と呑気に目標の一つが達成されたことで安心した。

さて、ここに来られたが次に行わなければならないことはなんだろうか。

魔王城に来られたのはいいが次にすることを考えていなかった。

魔王城なんだから魔王と会って。会ってどうする？　ここはファンタジー常識で考えて魔王退治の方向に進むべきか。それとも世界の半分貰って魔王の仲間になるか。あ、俺は勇者じゃないや。

「魔王に合わせてくれ」

「どっちのですか？」

「はあ？　魔王は魔王だろ、この魔王城の主人だろ」

「はいはい、魔王様の方ですね。いや、無理ですよ。最近ずっとみてないですもの」

「最近っていつから？」

「10年以上、お部屋に籠りっきりになってます」

7・魔王は引き籠りのようです

それは最近と言うのか。10年前と言えば小学生でブイブイいわせていた懐かしき幼少期だ。

「引き籠りの魔王なんて聞いたことがないぞ」

「そんな固定観念を持っていたら駄目ですよ。もっと柔軟に思考を巡らせどんな状況にも打ち勝てるようにしなければなりません」

この吸血鬼は何をいつているんだ。こちらら今までの固定観念を破壊されている状況に陥っているんだ。魔王が引き籠りだと聞いたら拍子抜けにも程があるだろう。

それになんで俺はこんな場所にいるんだろうか。あの少女はなんだったのか、思い出したくないが夢でもなさそうだけれど手足は無事だ。

「俺はなんでここにいるんだ？」

「姫様が引きずってきたんですよ。いやもう、あれは驚きましたよ。吃驚仰天ってヤツです。手と足がゴムみたいにぐにゃぐにゃんになっていましたから」

イーシエは腕をぶらんぶらんと揺らしながらジェスチャーをする。夢でも幻でもなく嫌な現実だった。ゴムみたいに、ってそんなに酷い状態だったのが恐ろしい。でも今は何ともない健康状態だ。

それに姫様って、あれが姫様なのか。イーシエの言う姫様って名前ではなく名称だよな。ならこの魔王城の姫様ってことは魔王の娘ってことになる。

「姫様って魔王の娘なのか？」

「ええ、もちろん当然のことです。先程までいたようですがどこに行ったのでしょうか。きちんと姫様にお礼を申し上げてくださいね。ここまで運んで治療もしたのは姫様なんですからね」
「はっ？」

どういうことだ。何故俺がああ恐ろしい少女にお礼を言わなければならぬことになっている。運んで治療をしただと、運ぶ前に俺をゴミみたい、いや、ゴムみたいな状態にしたのはおたくの姫様ですよ。これが権力者の使うといわれる改竄というわけか。さすが魔王の娘、きたない。

「いや、それはあの娘が俺を襲ってきて……」

イーシエが俺の話している途中でぴくんと体を震わせてドアの方向に視線を向けた。

微かに開いている扉の向こうにある廊下から足跡が聞こえてくる。軽い足取りでこちらに向かってくる。

「では、私はこの辺で失礼しますよ」

近くの窓を開けてメイド服を風で揺らしながら焦った顔をしている。

「私は綺麗好きの掃除嫌いな使用人イーシエでございます。今後もお見知りおきを次期魔王様？」

扉が開かれると同時にイーシエは窓から飛び降りた。イーシエが飛び降りる最後の言葉が扉の開閉でよく聞こえなかった。

窓から視線を開いた扉に移すと白いワンピースではなく黒いドレスに衣装替えをした少女が笑顔で立っていた。

純真無垢な穢れの無い笑顔。逆にそれがその少女の畏怖を最大限に活かしている。

無意識に無自覚に俺の手足は小刻みに震える。暴力という恐怖は体に染み込み、傷が治ったとしてもそれは知覚として体が覚えていく。

少女に合わせて俺は歪んだ笑顔を見せる。そうしなければいけないと体が無理矢理命令させる。

漆黒の少女は一直線にこちらへ歩いてくる。目の前の障害物である高価そうなテーブルや椅子を乱暴に投げ飛ばしたり蹴り飛ばしたりして排除する。それは道の上の小石をなんとなく蹴り飛ばす動作のような自然さだった。

ベッドで上半身だけ起き上がっている俺は固まって動けずにいた。一歩ずつ近づいてくる少女に圧倒されていた。

通る道には何も残らないと言わんばかりに俺と少女の直線状にあった家具は破壊され部屋の隅に無残な姿で追いやられていた。

近くまで来ると少女は俺の胸にダイビングアタックをクリティカルヒットさせた。その衝撃で後頭部は背後の壁と激しいキスをした。俺の意識は脳内と共に一回転して吹き飛ばされるが腹部の激痛によって強制覚醒をされることになった。

意識が朦朧とする中で俺の胸に少女が顔を擦り寄せているのが辛うじて分かるほどだった。後頭部にじつとりとした液体が流れている嫌な感覚があるがその場所に痛みはない。

顔を上げた少女は整った綺麗な容姿で誰が見ても美少女という顔立ちだ。

「やっと起きたんだね。もう、寝坊助さんだなあ」

寝かされた原因はお前だろう、というツッコミをする力も削られ

た俺は定まっっていない焦点を合わせることだけに集中していた。

「……ねえ、ここに誰かいたよね？」

使用人の吸血鬼さんが入れ違いにいましたよ、と言葉にしようとしたが何故か口から空気が抜けるだけで言葉が出ない。

少女は俺の服を剛腕によって一瞬で破り布切れにした。これで二度目の追剥にあってしまったわけだ。一度目の服はおっちゃんのお下がりです二度目の服はみたことないものだった。

「誰がいたの？ 私以外の誰が触ったの？」

誰？ ねえ、誰？ と繰り返される質問が脳内で壊れたテープみたいにループされる。

徐々に痛覚等の感覚が戻って来きて後頭部にまるで心臓があるように血管の鼓動に合わせて痛みがじわじわと襲う。

衰えていた脳内がようやく正常になる頃には少女の表情は笑顔とは程遠い無表情になっていた。

「ねえ、聞いているの？」

「ああ、聞いている」

これが二度目の会話。前回は会話にさえなっていなかったような気がする。

返事を返すと少女は背後で後光が射すくらいの笑顔に戻り抱きついてくる。今回は力の加減ができているらしく少し窮屈な程度の力の入れようだ。

「今回は許してあげる。私は心がとっても広いのです」

「う、うん？」

「一体俺は何を許してもらったのだろう。本来なら許す、許さないっていうのは俺の方ではないだろうか。まだ頭の中が混乱状態で正常な思考ができないようだ。」

「だからね、私以外に触れたら今度はすごく怒るからね。わかった？」

「は、はい？」

「どういうことか誰か説明してください、と心の中で問いかけるが所詮自問自答になるしかなく自分で考えるしかない。」

「この娘がもし、すごく怒ったらどのくらいの恐怖なのだろうかと想像したら何も無い空間が作られた。つまり、何も残らないという結果が導き出された。」

「イーシエの言う通りならこの娘が魔王の娘でお姫様というわけなんだよな。」

「見た目はお嬢様のように綺麗で美少女だ。うん、見た目は完璧なお姫様だ。」

「力は、行動力は、威圧感。うん、全て完璧な魔王候補だ。」

「俺の拙い思考能力と掻き集めた情報量により導き出された答えはただ一つ。この娘は真正正銘の魔王の娘だ。」

「そうだ、魔王の娘なら魔王に合わせてくれるかもしれない。イーシエは使用人だから魔王に直接会えないだけだろう。身分差故にイーシエは無理だといったのだ。いくら引き籠りでも娘の頼みなら親は聞いてくれるだろう。」

「魔王様に会いたいのですけれど。会わせてもらえませんかね、なんて」

「お父様に？　ずっと前にお父様をぐちゃぐちゃにしてから見てないの」

音が鼓膜を揺さぶると同時に時が止まる。思考が理解に追い付かず言葉は意味としての音ではなくなったあのノイズのように聞こえる。ゆっくりと音が意味という形を作り思考が理解を形成する。そして時は動き出す。

お前の仕業かツツ！！！！

魔王を引き籠りにしたのはお前がやったからかよ！！

魔王をぐちゃぐちゃにした、だって意味が分からない。勇者より先に娘に討伐された魔王なんて初耳だ。どんな家庭で育ったらこんな風になるんだよ。

もしかして魔王はもう亡き者になっているのか。ただの屍のようだ、みたいなことになってるのか。

でも、イーシェは引き籠りだつて言っていたから生きてる、はずだよ。普通は10年も経っていたら生存は絶望的だけど。仮にも魔王なのだから餓死とか娘に殺されることなんてあるはずない、よね。

「ミコトはお父様に会いたいの？」

「ああ、そのために来た、ってなんで名前を？」

自己紹介なんてした記憶はない。記憶が消されたり記憶喪失になつたりしていなければの話だけど。

「ミコトを連れてきた時に使用人に教えてもらったの」
「なるほど」

俺の名前を知っている使用人と言えばイーシェしかいない。彼女がこの娘に教えたのだろう、それしか今の俺には考えられない。そういえば俺はこの娘の名前を知らない。別に知らなくてもいいのだけれど知っていて損はないだろうし。

「それで、君の名前は？」

「私の名前はねえ」

漆黒に身を包んだ可愛らしい魔王の娘は口角を上げて溜めを作る。愛らしく小柄な少女はただ笑顔でいれば完璧な美少女だ。両手を俺の頬に触れて優しくそんな化粧もしていない自然な唇が開かれる。

「真桜まおうだよ。まーちゃんでも、さーちゃんでも桜でもミコトの好きな私で呼んでね」

8・神器の刻印

マオウ、魔王？ マオウの字が分からないし魔王と被るのでまーちゃん、さーちゃんのどちらかと考えたが、この娘にちゃん付けはどうかと思ったので消去法でサクラに決定しました。好きな名前ではなく消去法で人の名前を選ぶという失礼極まりないことだが罪悪感は一切ない。

イーシエがどっちって言ったのは魔王とこの娘が同じ読み方だからか。

作り笑顔で「じゃあ、サクラで」と遠慮しがちに言うと魔王の娘もといサクラは口角をもっと鋭角にして笑顔というよりにやけ顔に変えていた。

「ねえ、もう一回呼んで」

「……サクラ」

照れ笑いをしながら俺の両頬を變形させてやるぞという勢いで上下左右斜めに万遍なく手の腹で押される。

「もう一回、ねえ、もう一回」

「ひゃ、ひゃくや、しゃるら」

「キヤー……ノノノ……!!」

こちらが叫びたい気分。テンションの上がったサクラは手を高速で動かして頬を歪ませる。二回ほど鼻の穴に綺麗な伸びた爪が生えた指が突き刺さって血管が破裂して真っ赤な液体がベッドに滴る。

鮮血が付くのを気にすることもなく俺の背中に手を回して強く抱きしめる。

この娘の強くという表現は基本の強くを20割くらいにしたもの

と考えて欲しい、とにかく強いのだ。強すぎて背中がバキバキと周りからは気持ちいい音が聞こえるだろう破壊音をさせる。

肺が圧迫させられて空気が抜けるだけの一方通行状態なわけでした窒息死の寸前まで当然のように追い詰められる。

「いはあああ、はあああ、へえええええええ」

痛い、止めて、と日本語翻訳してみる。

「ん、何？ どうしたの？」

不思議そうな顔をしながら首を傾げる動作は小動物を連想させる可愛さだが時と場所が違えば印象は違っていただろう。良いか悪いかは別として。

背中に回されていた腕の力が弱まった一瞬の隙を逃さず新鮮な空気が肺の許容量いっぱいになり吸い込んで窒息死までの時間を延ばすことができた。

「……痛い、力が強すぎるんだよ」

「ふっふふ、愛の力はまだまだこれからだよ」

人がそれぞれ取る解釈って違うのだからってことが分かった。

恥ずかしい台詞を堂々と言われるがちつとも嬉しくない。だから時と場所と人が違えばなんたらかんたらだ。

自らの愛の力と比例して腕力で俺の体に痛みを刻みつける。愛とは痛みと比例するのかと間違った解釈をすることになった瞬間だった。

腕を脱出させていた俺は痛みを堪えながら少女の整った顔を手で歪ませるが効果はあまりないようで「うにゃ、うにゅ」と猫撫で声を発するだけだ。

指をピースの形に変形させて狙いを定める。さっきのお返しだと思いながら少女の小さな二つの鼻孔に一本ずつ俺の太い指を突き刺すと「にぎゃッッ!?!?」とサクラは猫のように飛び上がった。成功だ。これから抱きつかれたら一発鼻の穴にぶち込んでやればいいという対応ができた。

サクラは鼻を抑えながらこちらを睨む。その間に肺に新鮮な空気を吸い込んだり吐き出したりを高速で繰り返す。やりすぎて過呼吸みたくなって咳き込んだ。

「いきなり何をするんだー」

「だから力が……強いんだよ」

裸にされた上半身を見ると少女の形に皮膚が赤く跡を残していた。それを細く鋭い目付きにしてまじまじと見てくる。

「ミコトは壊れやす過ぎるよ。でもね、壊れたら私がぴゅぴゅんってすぐ元通りにしてあげるよ」

「……………」

人差し指をくるくると回しながら鋭い目つきを緩ませる。

啞然として言葉がでない。弱いとかなら分かるが壊れやすいと表現されたのは初めてですよ。腕や足が壊されたとして治っても心は治りそうもないかもしれない。

強さのレベルとか次元がこの娘と俺は時間や空間を越えても尚分らないくらい違うのだろう。初めて会った時から感じたことだけだ。

話題がこの娘の名前やら俺の体の脆さに変わっていたけど本題に戻さなくては。俺はせっかちで余計な話題を盛り込むのは好きではない。嫌いでもないけれど今は自分優先で自己中心的行動に出ても問題はないはずだ。早くこの世界とバイバイキーンしたいから。

「それでお父様に会いたいのだけだ」

「お父様に？ ええと……！！」

なにか閃いて納得したようで首を上下に微かに振っていた。

「娘さんを頂きにきましたってやつだね」

「……………」

どう、どういう風に、どうやってツッコミをすればいいんだ。なにかが間違っている。いろいろ間違っている。話を合わせるべきか、違うと言うべきか。

下手な答えを出せば将来は決定される。肉体の死か精神の死かどちらかを選べと言われている気がする。

どちらも無事と言う選択肢が見つからない。面倒でそうだよ、とか曖昧な返事で言う精神和の死は決定だ。嫌だとか否定の言葉は肉体の死は決定だ。どちらにしても最終的な死は変わらないが。

「それはまだ早い気がするんだよね。もっとお互いのことを……………」

「ミコトと私は同じなの、一緒なの」

漆黒に彩られたドレスの肩部分をずらして白い真珠のような綺麗な肌を晒し小振りの形のよい乳房が目の前に現れる。

視線が上下左右に加速しながら泳ぐ。

「ほら、見て。ミコトと私は繋がっているの」

両手で顔をがっちりと掴まれて指で目を強制開放され固定される。視界にはシミも傷もない肌が占領している。

左胸の肌に赤い線が刺青のように入っているのに気付く。

赤い線は円を描きその円の中には細かに装飾された赤い線が模様を作っていた。それは俺の左胸に刻まれている印と同じだった。多少模様が違うみたいだがほとんど同じ。

「これは……？」

「神器の刻印。私達以外皆殺すために神様がくれた特別な力だよ」

9・加減知らず

茫然。身体が硬直する。

頭が痛い。ぶつけた場所ではない場所に熱が発生する。

正直何を言われても信じられないくらい俺の脳内は変容して寛容になつてきたけれどこれは如何なものだろうか。

神様が与えた己の生命以外を消し去る超素敵な幻想的な主人公補正能力を手に入れましたよ。努力もなく最初からご都合主義の物語の始まり、始まり〜。

って、なんだそりゃ。とノリツッコミを悲しきかな脳内会議を一人で済ませた。

頭の熱が段々高温になるのを感じながら全身の肌は鳥肌を催して低温になるのを実感する。

「神様はなんで俺にそんな力をくれたんだ？」

「私と一緒にいるためだよ」

真面目な返答は期待できないと確信した瞬間に苛立ちを覚えたけれどこの娘に対して反撃はできない。本能と理性が共に圧倒的なまでの実力差がそれを阻止させる。

この娘には何の期待もできない。ただ俺にとって不利益な状況を生み出さない事が身に染みるほど理解はできた。

この素晴らしい能力の詳細を訊き出したいがこの娘に訊いても意味のない時間が過ぎるだけだという結論は刹那に脳内解決した。

どんな力を神様がくれたって元の世界に戻る力ではなかったら意味はない。命を摘み取る力を貰っても他人にとっても有害であるし

自分にとつても障害になるしかない傍迷惑だけの邪魔なものだ。

神様によつて選ばれた伝説の能力使い。馬鹿馬鹿しい。全くもつて馬鹿げている。

人類を滅亡させる最強の能力。阿呆らしい。ファンタジー世界に必要な不可欠な能力だろうけど俺には必要ない。

特別な力なんて必要ないから元の世界に帰してほしい。神様は自分の望んだモノを与えてくれない癖に他人が望むモノを与える天邪鬼だ。

俺はそんな神様を一生怨むし一生信じないと誓いを立てることにした。

この状況の打破もしなくてはいけない。とりあえずこの場所から動かないと一方的に迫られるだけだし。

「ほら、お父様に会いに行こうよ」

「ん、後でいいよ」

「いやいや、よくないよ挨拶しなくちゃいけないしさ。ほら、サクラにとつてもそれが一番いいことだしさ」

「じゃあその後結婚式する」

頭に血が上るのが容易に容易く簡潔で簡単に分かった。後頭部から沸き出る新鮮な血液がベッドの純白なシーツを鮮やかな赤色で染め上げる。

目眩がする。吐き気がする。思考が理解に追いつくことができない。

常識という概念がこの娘にはなく非常識しかないことが新たに分かった。元々そんな感じがしていたけれど。

口がパクパクしている俺は情けない顔をしているのは間違いない。余りのぶっ飛んだ対話に声帯が仕事をしてくれないようだ。それはどう返事していいのか全然わからなかった。反応によって本当に殺されるかもしれないと恐怖を感じた。

「ねえ、どうしたの?」

天使や女神も顔負けの満面の笑顔が一層恐怖を増幅させる。絶対に断られないと思っている心底からの笑顔。いや、それしか頭の中には存在していない。

サクラはベッドからぴょんと飛び降りて、ずらした上半身のドレスを直そうともせずはこちら側に振り向いて手を差し伸べる。

「お父様の所へ行くんでしょ」

サクラの笑顔は崩れない。俺は血の気が引いて青褪めるが後頭部からの出血は思ったよりも酷いようで血の気が引いても溢れ出る量は変化がない。

「ミコト、行くんでしょ?」

「あ、ちよつと、ぐえ」

二度目の言葉よりも先に手を握られベッドから意思のない人形のように引き落とされた。

四つん這いになり床が視界に入る。裝飾された赤い絨毯にもっと濃い朱色の液体が金色の刺繍を塗り染める。一滴一滴大小の液体が額から頬から滑り落下する。

「赤いのいっぱい出てるね。ここからだね」

「!!!?」

後頭部の傷口を指で抉られぐりぐりと傷口の中に指が侵入する。

熱い、とても熱い頭に心臓があるかのようにドクドクと鼓動の音と共に熱が痛みを押し上げる。

身体が動かない。反射すらできず抵抗もできない。ただ扱られ開かれるだけ。痛みを堪えて声を張り上げるだけ。

「言ったでしょ、壊れたら私が治してあげるって」

言葉の後に後頭部が火に炙られた錯覚をするほどの高熱が全体に拡がり顔を経由して床に滴り落ちる血がその流れを止めた。

熱さは温かさに変わり痛みは安らぎへと変容した。

激しく運動していた呼吸と心拍数は正常な状態へと移行する。

「はい、できた。……まだ痛いのか？」

「……痛くはない」

肉体は回復したが精神は回復できなかった。

俺は絶対に関わってはいけない者と関わってしまったのだと絶望した。

壊れたら治すと言った意味を理解してしまった。あの森であったことは現実で夢ではない。イーシェが言っていた、姫様が治療した、と。

こういうことだったのだ。折られても切られても元通りにしてしまふこの娘の魔法。バラバラになった場合は分からないが身体がくっ付いているかぎり元に戻るのが分かった。

怪我も傷も痛みすらもすぐに治してしまう。本来なら夢の魔法。

この娘にボコボコになぶられ瀕死にされようが俺は治され再び同じ目に合わされても元通りになる。

死ぬことは恐いが死の寸前を繰り返されるのはもっと恐いのだと感じた。対象が死んだ時に蘇生ができるのかはわからないけれど。

だからこの娘は加減を知らないのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1620t/>

魔王の世界の救い方

2011年8月18日20時39分発行